医療史跡

寡黙なる巨人
多田 富雄

国際的な免疫学者でエッセイや能の作者としても知られた多田富雄（1934～2010年）は，2001年5月2日に脳梗塞で倒れ，一夜にして右半身が麻痺し，構音機能を失い，嚥下障害に見舞われる。夫人の献身的な介護によって絶望の淵から這い上がり，厳しいリハビリの中で気づく。「失った神経細胞は戻らない。体が動かなくても，言葉が喋れなくても，私の生命活動は日々創造的である」と。左手の指でキーボードを一語一語押し，一文を完成させると音声に変換する「トーキングエイド」を用いて会話した。

多田は，茨城県立結城二高から千葉大学医学部に進学し，卒業後病理学教室に入局した。1963（昭和38）年コロラド大学に留学，免疫学を研究，1971（昭和46）年に免疫応答を調整するサプレッサー（抑制）T細胞を発見（現在は制御性T細胞に代わられている）。ベーリング賞や朝日賞に輝く等免疫学者として優れた業績を残し，1974（昭和49）年に千葉大学教授に就任した。1977（昭和52）年に東京大学医学部教授に迎えられ，1984（昭和59）年に50歳の若さで文化功労者として顕彰されている[1]。

能への造詣も深く，脳死と心臓移植の問題を見つめた新作能「無明の井」，朝鮮半島から強制連行の悲劇を描く「望恨歌」，アインシュタインの相対性理論がテーマの「一石仙人」等がある。いずれもシリアスなテーマを日本の伝統芸能の中に描き出し，自ら大倉流の小鼓を打ち（**写真1**），能楽堂に通う。留学したアメリカ，デンバーは非常に乾燥した土地であり，持参した小鼓を湿り気の多い浴室に置いていたと，若い留学時代のエッセイで述べている[2]。

1995（平成7）年に東大を定年退官した後，東京理科大学の生命科学研究所長に就任。大佛次郎賞の「免疫の意味論」（青土社・1993年），日本エッセイスト・クラブ賞の「独酌余滴」（朝日新聞社・1999年）等，旺盛な文筆活動を展開している。小林秀雄賞を受けた「寡黙なる巨人」（集英社・2007年）は，2001年に脳梗塞で体の自由を奪われ，突然身の内に出現した「巨人」と多田が，必死の折り合いをつけながら共棲した6年間のエッセイ集である[3]。

2005（平成17）年の暮，NHKスペシャル「脳梗塞からの“再生”―免疫学者・多田富雄の闘い」（**写真2**）が放映された。話ができず，飲み込み困難，歩行もできない4年，懸命なリハビリの中で「命の再生」に取り組む多田のドキュメンタリーであった。これだけのハンディキャップを負いながら，「リハビリは科学，創造的な営み」と冷静に闘病を伝えることのできる人はいない。原爆60周年に合わせて新作能戦争三部作，「原爆忌」，「長崎の聖母」，「沖縄残月記」を書き公演する[4]。

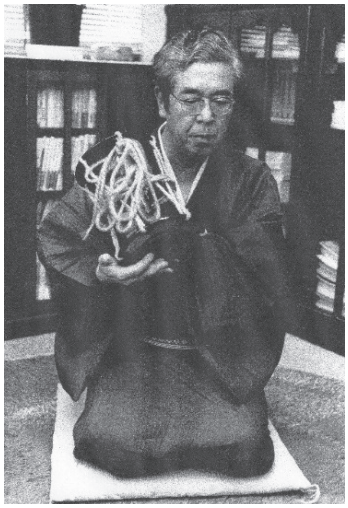

写真1　多田式江氏の好意による

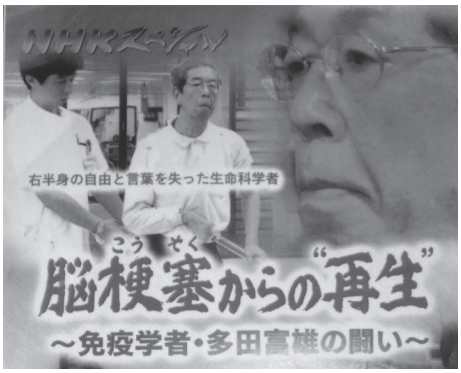

写真2　多田和夫氏提供

また2006（平成18）年から厚生労働省が導入したリハビリ日数制限に対し，自らの境遇も踏まえて「リハビリ患者を見捨てて寝たきりにする制度であり，平和な社会を否定する」と厳しく批判した。そして科学の問題点を解決できるのは「科学の知」と「人文の知」広い意味でのリベラルアーツの知がなければならないと「自然科学とリベラルアーツを統合する会」（INSLA）を設立する等，従来以上に精力的に活動した多田は，倒れたことで何をつかみ，いかなる未来を見据えていたのか。

参考資料

1）鈴木昶，日本医家列伝，444-448（2013）
2）多田富雄，春楡の木陰で（2014）
3）多田富雄，多田富雄コレクション第3巻「人間の復権―リハビリと医療」（2017）
4）多田富雄，多田富雄コレクション第4巻「死者との対話―能の現代性」（2017）

（日本診療放射線技師会　諸澄邦彦）